
Refrain my life

花壇ガーディアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Refrain my life

【Zコード】

N1622BA

【作者名】

花壇ガーディアン

【あらすじ】

あなたは、あなたが死ぬその瞬間、何を考えると思いますか？

人は、突然その生涯を終える時、きっと後悔する事があるだろう。あれをしておけばよかつた。

これを伝えておけばよかつた。

時間はいくらあっても足りないから。

残される者に、すべてを伝えるために。

最後の瞬間を、もう一度生きて。

もう一度生きて、やり残した事が無いように。

優しく微笑む二つの瞳の世界。

my lover 1(前書き)

初投稿となります

pixivさんに投稿していた小説なのですが
もつかい別サイトに投げてみたら?
と言われてしまつて……

ここに投下します

文才のない僕ですが
よろしくお願ひします

December 18th

眠りから覚めると、薄くぼやけた視界は、白く染まっていた。この白は、私の部屋の天井の白。布団の白。そしてカーテンの白だ。そのカーテンの隙間から差し込む光は、まだ淡く、弱い。しかし弱いながらもはつきりと、命あるものに“朝”を知らせている。

布団にくるまつたまま田覚まし時計を見ると、時間にはまだ余裕があるようだ。一度寝することを決めた直後、私の一番好きな曲が、部屋中に鳴り響いた。寝起きのせいでそれに即座に反応することができず、しばらくその曲を聴いてから、もぞもぞと布団から這い出た。

その音の発信源である私のケータイを取る。着信画面には“俺様は神”と表示されているが、別に相手は神ではなく、私の友人。ヤツがふざけて勝手に登録したのだつた。

「……もしもし」

『あ、ヒナ？ 起きてた、かな？』

眠さをなんとか堪えて電話に出ると、電話の向こうから聞き慣れたムカつく声が聞こえてきた。

「いや、寝てた。誰かさんに起しきされたんだよ」

『ああ、そりゃひどいヤツだ。こんな時間に叩き起しきすなんて、信じられないね』

こいつ、人を叩き起しきといで、悪びれる様子もないらしい。

「あー、そりゃう。もうそんなヤツと話したくないからさ、ぱいぱい」

『あ、ちょい！ちょい待つた！』めん『めん……』

適当にあしらおうとすると、今度は慌てて引き止められた。

「最初から謝ればいいものを」

『ん、ごめーん、ね？』

「謝り方が気に入らない。今度こそ、じゃあな」

『あ、ちょい、待つ……』

つー、つー、つー。

あの生意氣な態度と鼻にかかる声に腹が立ち、電話を切つてケータイを放る。ケータイは、ぼふ、と布団に着地して、それはもう鳴ることはなかつた。あのバカは、電話を諦めたのだろうか。

カーテンを開けて外を見ると、外は真っ白。雪景色に覆われた美しい街並み なんてことはなく、せつかくの美しい雪も、泥にまみれて茶色く淀んだ色になつていて。なんと風情のないことか。

カーテンの外をしばらく眺めて、私は今日の授業のことを考えていた。体育があるのだ。普段は苦手な体育だが、雪が積もつていれば体育は体育館での授業になるだろう。体育館の体育といえば、バスケットボール。私の唯一の趣味、そして特技である、バスケットボール。

私の父親はプロバスケットプレイヤーで、地方のチームで活躍している、有名な選手だつた。私もその血を色濃く受け継いだのか、幼いころからバスケをして遊んでいた。小学校のミニバスチームから、中学校、高校とバスケ部で毎年レギュラー入りしていた。

バスケットには自信がある。女子バスケでは、誰と1on1をしても負けたことはないし、フリースロー対決も、リバウンドも、常に勝ち続けてきた。父もよく褒めてくれたが、私はそれが嫌だつた。私は、父を超えたかったのだ。父を超えるバスケットプレイヤーになりたかったのだ。

父を超えるために、毎日練習をしていた。毎日五百本のショート練習、三十分のハンドリング練習、三十分のドリブル練習、二時間以上の走り込みで体力も付けて、NBAの試合を見て研究もしてい

た。バスケに對して、あんなに真つ直ぐだったのに、必死だったのに、ついにその夢は叶う事がなかつた。

父は半年前、母と共に事故で死んだのだつた。

母とずっと仲良しだつた父。母と一人で手をつないで買い物に行つてから、何時間経つても帰つてこない。心配して待つていると、家に警察から電話が来たのだつた。“お父さんとお母さんが亡くなりました”、と。

病院に走つた。無我夢中だつた。私も、両親が大好きだつたから。いつも褒めてくれる、優しい父が好きだつた。練習を見守ってくれる、優しい母が好きだつた。バスケでは絶対に手を抜かない、厳しい父が好きだつた。練習のしすぎで遅くなるときつく叱る、厳しい母が好きだつた。

家からは遠い救急病院まで走つても、全く疲れなど感じなかつた。バスケのために鍛えた体力が、こんなことの役に立つなんて思わなかつた。

冷たくなつた母と父の体が並んでいる姿は悲惨だつた。猛スピードで突っ込んできたスポーツカーにぶつかり、二人とも、腰から下が切斷されていたから。お父さん、これじゃバスケができなくなつてしまふ。お母さん、これじゃ一緒に買い物に行けなくなつてしまふ。私はあの時そう思つた。

それから、私は親戚に頼らず一人で生きていくことにした。よく母の家事を手伝つていたし、大体のことは一人でできる。両親を失つたショックから立ち直るのには時間を要したが、最近ではすかり気持ちも落ち着き、今もこうして生きている。

しばらくしてバスケ部も引退し、バスケができない日が続いた。こうして最近はバスケに飢えた毎日を送つていて。というわけで、回想もほどほどに、私は今日の体育が楽しみなわけだ。

「…………ふわあ…………」

一つ欠伸をすると、学校に行くために、その辺に放り投げてあつた制服を着る。ろくに使いもしない勉強道具を鞄に詰めて、ケータ

イをポケットに入れた。洗面所で顔を洗つて、眠気眼の自分を鏡で見た。仏頂面は、父譲り。ここは母に似た笑顔の素敵な女の子がよかつた。背が低いのは母譲り。ここは父に似た高身長がよかつた。いいとこ取りなんてことはできないわけか。

玄関に掛けたる「ノートを着て、マフラーを巻く。」このところはマフラーがないと寒くてやつてられないから、この安っぽい、毛玉だらけのマフラーにも助けられている。革靴を履いて、玄関にあるバッシュを袋に入れて、通学鞄と一緒に持つた。玄関の鍵を開け、ドアを開けると、

「やあ、ヒナ？ おはよう」

田の前にいたのは、爽やかな短髪（見ているだけで寒い）に長身（憎たらしい限り）の、眼鏡をかけた男だった。こいつが紛れもなく先ほどの電話の主であり、私の唯一の友人。こいつには本当に世話になつていていたのだが、この男、なにせ遠慮が足りない。先ほどのように電話で叩き起されたり、気がつくと家の中にいて、ご飯を作つていたりもする。洗濯物を勝手に畳んでいたときにはさすがに引いたが、どうやらこいつなりに、一人暮らしの私を手伝ってくれているらしい。気持ちは嬉しいのだが、こいつ、気持ち悪いんだ。

「……ストーカーだな、まるで」

「いやあ、否定できないかも？」

「ならやめてくれ。気持ち悪い」

「あはは。照れちゃって」

こいつのこの、「やにや」としたいやうらしい笑顔。本当に腹立たしいことこの上ない。

「あのなあ。おまえ、さつさと学校行けよ」

「ん、ヒナも今家を出るところだつたんじゃないの？一緒に」

「おまえと一緒にには行かないからな

「ありや、つれないなあ」

さつさと横を通り抜けて、私は学校に向けて歩き始めた。こいつも私の後ろをついてきて話しかけてくるが、無視を決め込んでやる。

「こいつは何故かいつも私の家までやってきて、私に付きまとつのだ。

「ね、今日の体育、一緒にバスケしようよ？」

「……」

「ほら、久々のバスケじゃない？ 楽しみだなあ」

「……」

「あれ、バスケしたくないの」

しつこく懲りなく話しかけてくるが、本当にうざつたいことこの上ない。勝手に隣を歩いてくるし、こいつは背が高くて足が長いから、背の低い、歩きの遅い私に合わせてゆっくりと歩いてくる。さつさと行けばいいのに。

私は返事もしないし顔も見もしないのに、こいつは私の隣でペラペラと喋っている。耳障りな鼻にかかる声で、私に語りかけている。

「ああ、早くバスケしたいなあ」

バスケなら、私だってしたいつづーの。

「ヒナ、無視はよくないようん」

ここで初めて、悲しそうにそつまぐので、とりあえず顔だけ向けてやった。こいつはそれを見て、希望に満ち溢れた笑顔を浮かべた。相変わらず気持ち悪い笑顔だが、確かに私に微笑みかけていた。何故こいつは、こんなに私に執着するのだろうか。幼馴染だからだろうか。

「バスケしよう、ね？」

「うるさいな。わかつたよ」

「やつた。決まり、だね」

結局こいつは私の隣を歩き続け、学校に到着した。こいつとはクラスが違うのだが、なんと運が悪いことに体育の授業は二クラス合同で行うのだ。楽しみにしていた体育の授業も、なんだか嫌な授業になりそうだ。

m y 1 o v e r 2 (前書き)

続けて3話まで投げます。

After 8 hours

放課後。机に突つ伏して寝ていた私は、鼻にかかる耳障りな声で目を覚ました。普段、授業中はほとんど爆睡をかましているので、放課後、誰かに起こされて帰宅することが多いのだが、今回はたまたまそれがこいつだっただけの話。しかし、どうも気に入らない。こいつだからか。

「ヒナ、帰るよ？」

結局、今日の体育の授業もバスケじゃなかつたし。つまらない一日だった。

「うつさいな……勝手に帰れよ」

「そう言われてもさ。掃除の邪魔になつてるよ？」

「……あ」

言われて氣付くと、両手で箒をもつて立つてゐる、おさげの女の子がいる。彼女はこっちを見て、申し訳なさそうに笑っていた。

私は、掃除当番の仕事の邪魔をしていたようだ。迷惑をかけてしまつて申し訳ない。

「あ、急がなくていいからわ」

慌てて帰宅する準備をする私を見て、彼女は氣を遣つてそう言ったが、実際、私が彼女の立場だったら、邪魔で仕方ないだろうな、と思った。しかしなんだろう。この彼女がまとう“不憫”オーラ、というか……。いや、オーラ、なんて言つたが、別にテレビに出てる金髪のバケモノに用はない。ただそんな雰囲気が、彼女を包んでいた、というだけの話。

私が悪いのに、何故謝られたのだろうか。気を遣っているのはそつちだりうに……というか。この子の名前は……なんだつたつけ？一緒にクラスではあるが、いかんせん他人と話をしないものだから、人の名前とかそんなものはよく覚えていないのだ。

「それじゃあね、マキちゃん」

あ、そうだ、マキちゃんだった。そして、このバカ男は、レイ、と呼ばれている。私も、どうしても必要な時はその呼び名で呼ぶ。といつても、私からこいつに用があることなんて、ほとんどないのだが。

愛想笑いの下手な、不憫な女の子、マキと別れ、私は家路に就く。せっかく持ってきたバッシューも下駄箱に置いたままで、田の畠を浴びることはなかつた。

「バスケ、できなかつたね」

と、私が考えていたことを見透かしているかのように、レイは私に話しかけた。というか、またついてきていたのか。

「そうだな」

答えるのも面倒くさかつたのでそう適当に返すと、レイは自分のバッシューを持つて、またにやにや笑つている。

「部活、見に行こうよ」

彼も元々は男子バスケ部員で、部長を務めていた。男バスと女バスはよく合同練習をしていたため、何度も練習試合もしたが、こいつはかなり優秀なセンターだ。スマートフォワードの私は、よくショットを弾かれたのでよく覚えている。

私もこいつも部活が大好きだったので、別にこれから後輩たちに混ざって部活動をしても怒られないと思つ。

「……それは、いいかもな」

「決まりだね。部活、行こうか

たまにはいいこと言うじやん。

二人で体育館に向かつて歩いていると、歩きながら、レイは何故か深刻そうな顔をしていた。どうした気持ち悪い、と思つても言わ

「…にいたのだが、

「ねえ、ヒナ？」

レイのほうから話しかけてきた。

「なんだよ気持ち悪い」

「気持ち悪いかな？」

「ああ」

「そつか。なんとかしたほうがいいかな

やつと気づいたのか？

「……って、本題はそこじゃなくて、マキちゃんなんだけど。…
…どうして一人で掃除してたんだろうね？ヒナのクラスって、掃除
は四人で組んでなかつたつけ？」

「四人？ああ、そういえばそうだつたな」

言われてみればそうだ。私も普段は、名前もわからないようなや
つらと四人で掃除をしている。マキちゃんの他のメンバーも誰だか
知らないが、一体何故一人で掃除をしていたのだろうか。

「今日の掃除当番は、堀田、脇田、瀬能、マキちゃんの四人のはず
だね。あの三人、サボってるな」

「なんでわかるんだ」

「なんでって。ヒナのクラスのことだもん。なんでも知ってるよ?
本格的にストーカーじみてきたな。

「で、私はその三人、知らないんだけど。どんな連中だよ？」

「んーとさ、サッカー部のチンピラどもだよ。わかんないかな？つ
いこないだまで、煙草吸つて停学になつてたんだけど……覚えてな
いかな？」

「ああ、そういうふうは聞いたことがあるかもしれない。クラスから停
学者が出て、机が三つ空席になつていたことも、辛うじて覚えてい
る。そいつらが、掃除をマキちゃんに押し付けているということか。

「そいつらのせいか。かわいそうに」

「まったくだよねえ。ひどい連中だよ」

レイも頷き、笑顔も作らなくなつた。ここにつがにやにや笑いをや

めたときは、大体の場合、考え方をしているのだ。レイも表情には出さないが、かなり怒っているようだった。私だっていい気持ちではない。内気そうな女の子に掃除を任せて、そいつらは今頃遊び呆けていいるのだろうと思うと、腹が立つて仕方ない。

堀田、脇田、瀬能。その三人の名前が、珍しく私の脳裏に焼きついた。

m y l o v e r 3 (前書き)

今日の所は「」ままで投下です。

きゅつ、ぐつ……ぱすつ。

バッシュが床と擦れるスキー音。ショットを打つのに腕にかかる重み、おしてボールがネットをすり抜ける音。久しく聞くことのなかつた音、バスケのために全身を動かす快感。それらに酔いしれ、私の体は疲れを知らずに動き続けていた。

あれから私とレイは一人で部活に参加して、私たちはそれぞれ別々に、久しぶりのバスケを楽しんだのだ。練習試合などでいい汗をかいて、やがて生徒の下校時刻となつた。そこで後輩たちは散り散りに帰つていつたが、私は一人でシート練習を続けている。いつの間にかレイもいなくなつていたのだが、おそらく、かわいい後輩たちと一緒に帰つたのだろう。

時刻は八時を回り、私はさすがに練習を中断した。ボールを片づけて、体育館の電気を全て消灯、鍵も閉めて体育館を後にした。

電気のない夜の学校は、妙に恐怖感を煽る。非常灯の緑の光だけが頼りの廊下を慎重に歩いていく。曲がり角を曲がつて職員室が目に入った。ふう、と息をつき、光を見ると安心するのは人間らしいな、なんて思った。そのまま光が漏れている職員室に向かっていくと、

「……わっ！」
「きやあっ！？」

物陰から何者かに突然抱きつかれ、柄にもない女らしい声を出してしまう。

その何者かを見ると、長身の、髪の短い、にやにやと笑う男だった。薄暗い廊下だが、それはもつはつきりと田に映った。

「……へへー、ヒナ、びっくりし

ばきつ。

「ああ、もう、びっくりしたじゃないか！」

ムカつく！心臓が口から出るかと思った！

私を驚かせたこの男をグーでさんざん殴る。

「痛い！ヒナ痛い！」

「うつさいーここで寝てろー！」

満足するまでレイを殴ると、体を丸めて悲しそうに横たわるレイを放置して、息も荒く職員室に向かつた。

職員室のドアを乱暴に開けると、煙草の匂いが充満した部屋の中に一人、パソコンを凝視しながら作業をしている女性がいた。彼女は女子バスケ部の顧問で、独身のアラフォー。職員室は当然禁煙なのだが、先生はヘビースモーカーなので、煙草がなければやつてられないらしい。机の灰皿には、大量の煙草が山を作っていた。

「おお、ヒナか。お疲れさん」

気だるそうな眼をこっちに向けて、軽く手を擧げる。私は先生に小さく会釈し、机の上に体育館の鍵を置いた。

「いつもありがとうございます、先生」

先生は、バスケに飢えた私に練習時間を提供してくれる。先生は私の家庭の事情や、バスケに対する情熱を理解してくれている。それに甘えて毎日、というのも先生に申し訳ないので自重しているができるものなら何時間でも、何日でも練習をしたいのだ。先生はその間ずっと職員室で残業をしているが、この面倒くさがりの無精な先生が、一体何の仕事をしているのかはわからない。それこそゲームでもしているのではないだろうか。

「あ、そうだヒナ。レイのやつと会わなかつたのか？」

「ああ、さつきそこで。そろそろ力尽きてる頃だと思いますよ」

「……はあ？」

「さきなり背後から抱きつかれた、と簡潔に説明すると、先生はわ
つはつはと大声で笑いながら、咥えた煙草に火を点けた。

「ヒナ、そりやおまえ、あいつだつて男だ。男は皆ケモノなんだか
らな」

「そりやそうかもしけませんけど、だつたら他の女が何人だつてい
るじゃないですか。あいつ、あんな気持ち悪いのにモテるんだし。
女つて生き物の神経がわかりません」

そう、レイは異様にモテるのだ。あの気持ち悪い声、顔、態度。
あれが他の女子の目にかかるば、『かつこいい』らしいのだ。中に
は勇気を出してレイに告白する者もいるらしい。しかしレイはこと
ごとくそれを断つているとか。

理由は知らないし、レイから直接聞いたわけではない。ただ、レ
イの友人である私に、レイのことを見していく女子が多くて、こつ
ちも迷惑しているのだ。

「おまえだつて女だらう。レイのやつ、かつこいいとか思わないの
か？」

「あんなの、どこが！」

「その割にお前、いつもレイと一緒にいるじゃないか」

「あいつがストーカーみたいについてくるんです！私のことなんでも
知ってるみたいな素振りで、気持ち悪いつたらないです」

「でも、気持ち悪いにしてもだ。……認めてるじゃないか。バスケ
ツトプレイヤーとしても、友達としても」

言われてみれば、そうだ。あんなに気持ち悪くても、あいつ
は“友達”なのだ。いや、友達どころの話ではない。幼馴染であり、
私のことを誰よりも理解してくれている。そして、友達である私の
ことを大切に思つてくれているんだ。

「……はい。確かにあいつは、私の友達です。いいバスケットプレ
イヤーです。私の幼馴染です」

「……へえ？じゃあさ、あいつがなんで、他の人からの告白を断つ
てるんだろうな？しかも、おまえに隠して、だ。あんな飢えたケモ

ノが、新鮮な女を目の前に必死に堪えてる理由って、一体何なんだろ？

「そんなこと、聞かれても……」

「まあ、考えるこつたね。ヒナは人見知りもするし、自分に素直になれてない。おまえにはまだ、他人の気持ちを考える余裕がないのかもしない。だから、自分の気持ちもわからないんじゃないか」「先生は私にそう言うと、パソコンの席から離れて、マグカップを持つて給湯室に向かつた。

「今日はもう帰りな。外は真っ暗だ。おまえに何かあつたら、私は責任とれないからな」

煙草に混ざつて「一ヒー」の匂いがする。今から「一ヒー」を淹れるなんて、まだ仕事をするつもりなのだろうか。

「あ、はい。失礼、しました」

「ん。気をつけるんだぞ」

職員室から出ても、先生に言われた言葉が頭の中を搔き回す。

私の気持ちなんて、私が一番よくわかっている。それなのになんだ。まるでレイのことを、私が邪魔しているみたいじゃないか。

そんなの知るか、私は、レイじやない。私は、私なんだ……。

私は自分にそう言い聞かせて、家路に就いた。その道中、珍しくレイはついてこなかつた。

m y 1 o v e r 4 (録書き)

次の日となりました。 därre続きを読むことができます。

December 19th

朝。私はいつの間にか布団を剥がして眠っていたのか、寒さに目を覚ました。昨日の夜は家に着いてすぐ、風呂にも入らずに眠ってしまったので、昨日着ていたジャージのままの姿だ。若干汗臭い体のままだったので、今日は布団も洗濯に出そう。

起き上がってカーテンを開き、窓の外の光に目を細める。今日も外には雪が積もっていて、相変わらずの寒い朝だ。寒さに体を震わせながら、とりあえずバスタオルと制服を持って、シャワーを浴びた。

温かい湯を浴びながら、私は昨日の先生の言葉を思い返していた。

私の、気持ち……。

私はあいつを認めているのは確かだ。しかし、長年気持ち悪がってきたあいつのことを、私が好きになるなんてことはないはずなのに。あんなことを言われたぐらいで、なんで私はこんなに動搖しているんだ。

というか、だ。あんな奴のために頭を抱えているこの時間が、無駄で仕方ない。さつさと忘れよう……。

そう思つた矢先、家のインター ホンが鳴つた。一回。

「…………あいつだ……」

一度もインター ホンを鳴らしてくるこの遠慮のなさ。間違いない。私はさつさとシャワーから上がり、服を着た。湯冷めしないうちに冷たい制服の袖に手を通し、玄関先まで出る。と、「はーい、ヒナちゃん?」

玄関が勝手に開け放たれ、外からレイが入ってきた。手にはコンビニのビニール袋が握られていた。そして、レイの顔には、目元に絆創膏が貼つてあつたり、頬に痣があつたりする。何故かぼりぼろのレイに驚いて、目を丸くしてしまった。

「お、おまえ、どうしたんだよ」

「ん、ああ、これ？」

「まさか、昨日の私なので、か？」

「まさか。ヒナ、顔は狙わなかつたじゃないか」

「そうだけど……じゃあ、一体どうしたんだよ」

「……いやあ、ちょっと昨日ね。階段から落ちちゃつて」

「嘘つくんじゃねーよ、下手くそ」

「あ、あはは。まあ気にしないでよ」

そんな下手な嘘をついたあたり、こいつは何も聞かれたくないのだろう。私に隠し事をするなんて珍しい。

昨日、私が顔を狙わなかつたのも事実だ。一応こいつの売りは頗らしいし、そんな商売道具（？）を狙つてはかわいそうだと思って。「もしかして、心配してくれてるのかな？」

「……うるさいな。そりや心配するだろ」

「あはは、嬉しいなあ。最近冷たいもんね、ヒナ」

「おまえだつて、最近気持ち悪さに磨きがかかつてると」

「そうかなあ。ヒナに嫌われちゃう前に直さないとね」

「安心しろつて。もう嫌いだから」

「ありや」

レイはにやにや笑いながら、玄関の小上がりに腰掛ける。そのままたんと後ろに倒れ込み、玄関に寝転がつた。下から覗かれる形になつたが、私はスカートの中にジャージを穿いてるので、何の問題もない。

「……つまんないだろ？ ジャージなんか覗いても」

「んー、いやいや。ヒナのスカートの中だからねえ。ジャージでもモモヒキでも、なんでも大歓げ んぶぶーう」

「そつか。ヒナ的に、今のが気持ち悪いわけだ」

「言つ前にわかるだろ、それ」

「でもさ、抑えられない衝動、つていつの？……あ、そういうへは
い肉まん」

レイは「コンビニ袋からまだ温かい肉まんを取りだして、私に差し
出した。

「お、気が利くじゃないか。風呂上がりに肉まんなんて、聞いたこ
とないけど」

「いいねえ。乙なもんじゃないかな」

「そうか？」

雑談もほどほどに、私たちは今日も一緒に学校に向かう。道中、
どうもレイのことを意識してしまった私がいた。

「はあ、今日も寒いねえ、ヒナ？」

「……ああ、そうだな」

私がレイの私生活の邪魔をしているのだったら、何故こいつはこ
んなにしつこく私にかまつてくるんだ。関わらなきやいのに。

「いやー、今日から腹巻き巻いてきたんだけどさ。すっごい暖かい
んだ。いいでしょ？ヒナも巻いてみる？」

「……ああ、そうだな」

ただの友達なんだし、私だつていつまでもこいつと仲良くしてい
られるわけじゃない。高校生の今のうちぐらいだろう。卒業してし
まえば、きっと私たちは別の道を歩み、別の人生を送るだろう。そ
れなのに、私は人生のうちこんなにも、こいつに甘えてきたんじや
ないか。こいつが勝手にやつてる、なんてのは嘘。こいつのせいに
して、私は自分の弱いところを隠しているだけ。自分の欠点を、こ
いつに押し付けているだけ。本当に嫌なんだつたら、私はこいつを
ぶん殴つてもやめさせればよかつた。それこそ昨日みたいに。
こんなにも私のことを心配してくれているこいつを、私はどう思つ
ているのかなんて、そんなこと、口に出すまでもない。

私は、こいつのことが好きなんだ。嘘じゃない。私の気持ちなんて、ずっと昔から変わつていなかつた。こんなに気持ち悪い笑顔も、気持ち悪い言動も、行動も、何もかもが私の全てだつた。それなのに、私はその気持ちに蓋をしていた。気づかないふりをしていた。だから先生は、あんなことを言つたんだ。

「ね、ヒナ。今週の日曜、一緒にどつか出かけようよ」

「……ああ、そうだな」

いつだつてこいつは私の隣にいるんだ。私の隣で、にやにや笑つているんだ。私はそれを失いたくない。他の誰かにこいつを奪われるなんて、嫌だ。こいつがい人生なんて、嫌だ。

父と母を失つて、私の心はこんなにも脆くなつてしまつた。こいつに支えられて、甘えて生きてきたからだろ？ か。歩幅を合わせて隣を歩くこいつが、愛おしくて仕方ないなんて、私はどうにかなつてしまつたのかもしれない。

「やつたあ。じゃあさ、最近寒いでしょ？ 腹巻きだけじゃ心許なくてさ。上着を買いに行こいつかと思つてたんだけ、どれがいいか一緒に選ぼうよ。ヒナに、決めてほしいなあ」

「……ああ、そうだな」

「ねえヒナ。さつきから、まともに聞いてないでしょ」

いや、どうにかなつてしまつていてるんだ。間違いない。私は恋をしているんだ。その時点で、既にまともじゃない。まったくもつて、異常なんだ。

「ヒナつたらー！」

「……ん、あ、悪い。ぼーつとしてた」

レイの声でふと我に帰る。どうやら適当に相槌を打つていたのがばれたようだ。

「でも、約束は約束だからね」

「な、何がだよ」

「日曜日。一緒に買い物に行こつ」

「なんだそれ！ 私は嫌だぞ！」

「ダメ。やつをヒナ、行こうか、って言つたら、そうだな、って
言つたもん」

「そ、そんなの滅茶苦茶じゃないか。聞いてなかつたんだつて！」

「そりゃヒナが悪いんでしょー。聞いてなかつたんだから
「う」

正論である。

「考え」をしてたのかな？」

「ま、まあ そうだけど」

「珍しいね。ヒナが考え方なんて」

「まるで私が何も考えないで生きてるみたいな言い草じゃないか」

「やー、そうかも？」

「む。聞き捨てならんぞ」

レイは楽しそうに笑つて、私の頭に手を乗せた。頭をぐしゃぐし
やと撫で回され、私は抵抗するのだが、

「ヒナ！」

「ちょ、なんだよ、やめ　っー？」

突然、肩を掴まれたかと思つと、強い力で抱き締められた。昨日
みたいな悪ふざけではない。ぎゅっと、私の顔はレイの胸に埋まつ
ていた。突如として喋ることも呼吸することもできなくなつてしま
つた私は、レイの背中に手を回し、背中をぼふぼふと叩いて抗議し
た。冬だから厚着をしているらしく、ダメージはないらしい。

「　っ！　っー？」

「ヒナ、俺や。日曜日、楽しみにしてるから。だから、一緒に行こ
うよ？」

レイの心音が聞こえる。漫画みたいに鼓動が速くなつていい、と
いうわけではなく、いたつて普通、だつた。慣れているんだろうか、
とも思つてしまつた。私は背中を殴る手を止め、力を抜いてレイに
身を委ねた。

すると、レイは腕の力を緩め、なんとか呼吸することが許された。
「ぶはっ、苦しいつづーの……おまえ、いきなり何するんだよ！」

「……『めん、ヒナ。我慢できなかつた』

レイが、いつにない真面目な顔でそんなことを囁つもんだから、私は次に紡ぐ言葉を忘れかけてしまった。じつちまでおかしくなりそうだ。

「あ、あれか。……男は、ケモノ……なのか？」

「あはは、誰からそんなこと聞いたんだよ。……でも、そうかもね。まるでケモノだ」

レイは私を離すと、さつさと先を歩いてしまった。私はしばらく呆然とその姿を見ていたが、

「レイ！待てよ…」

気がつくと、声を張り上げていた。

自分でも説明できない思考が、渦を巻いていく。やがていろいろなものを吸い込み、奔流となつて喉から溢れ出していく。

「おまえだけじゃないつーの！私だって、我慢できないときぐらいいあるつーの！私だって、日曜日……楽しみだつーの…！」

大声なんか出すもんじゃない。力が入りすぎて、顔が熱い。今頃私は顔が真っ赤だらう。

レイは立ち止まって振り返り、私の声に驚いて目を丸くした。

「……そつか。ありがと」

「わかつたら、置いてくな、バカ」

「……あはは、ごめんよ」

私も震える足を一步前に出して、レイの隣を歩く。レイの顔を見るることはできなかつたが、きっとにやにやと笑つていただろう。私も、そうであつたように。

m y 1 o v e r 5 (前書き)

恋愛作家さまに向けてですが、書いて恥ずかしくなるとかも、あります?
ません?

うわあああああああああ！！

私はなんであんな恥ずかしいことを言つてしまつたんだ!!
昼休み、私は購買の焼きそばパンを齧りながら、目をぐるぐる回
していた。あんなの、生き恥を晒しただけだ。ああ恥ずかしい……。

「ん、あ、マキちゃんか」

隣の女の子はマキちゃんだった。昨日の掃除の件もあつてか、マキちゃんは気軽に私に話しかけてくるようになつたようだ。というのも、マキちゃんも内気だし、私もどうやら話しかけづらい人らしい。それはレイに言われたのだが、確かに好き好んで私に話しかけてくる人は少ない。友達ができた、のかな。

「うん、また停学、だって。こないだ帰ってきたばかりのこと、元気でいいのに」とかわいそうに

「三人でケンカしてたのか。仲間割れなんて、バカらしい」「いや、それがさ……実はね、私のお姉ちゃんが、それ見てたみた
いなんだ。これはここだけの秘密なんだけどさ。学校では、三人で

ケンカしてた、ってことになつてゐるみたいだけど、実は、堀田くんと脇田くんと瀬能くんの三人が、誰か一人とケンカしてたんだって。三対一、ってことかな。それは学校側は知らないんだけど、その人、ウチの学校の制服着てる人だつたんだって」

話を聞くに、堀田ら三人は、うちの学校の制服を着た何者かに、三対一で負けて、それを知らない教師共は、堀田、脇田、瀬能の三人が仲間割れをしている、と勘違いしている様子。

「へえ、難儀なもんだ。あいつら昨日掃除サボつて、マキちゃんに押し付けてたんだろ？天罰じゃないのか、それ」

「それはさ、いいんだよ。三人で、楽しく遊べたなら……」

「おいおい。なんかおかしいだろ、それ。マキちゃん一人に掃除押し付けて、何がいいもんか」

「で、でも」

「それとも何か。マキちゃん、一人で掃除したかつたのか？」

「いや、違うけどさ……」

「じゃあ、いいじゃないか。あいつらに天罰が下つたんだろ？それ

にしても、すごいな、そいつ。一人であいつらをシメたんだろ？ウチの学校にも、そんなヤツがいたなんて

「そうだよね。ちょっとかっこいいなあ」

「……いや、でも、おかしくないか？同じ学校なら堀田たちだつて

そいつのこと知つてるはずだろ。そしたら普通、そいつのことチクるだろうし。なんでそいつは停学になつてないんだろうな」

「あ、そういうえばそうだよね。なんでだる。三人以外の停学者はい

ないと思うし……口止めとか、されてるのかな？」

「……いや、三人がかりで一人にボコられたのが恥ずかしくて言えない、とか。大方そんなとこだな、きっと」

「あ、なるほど。あの三人、プライド高そうだしね。納得」

「……でも、誰なんだろうな。お目にかかりたいもんだ」

「そうだね……気になるなあ」

と言つていた最中、教室のドアから、レイが入つてきた。寒い寒

い、とか言いながら、小走りで私たちの方に向かってくる。

「お、マキちゃん。ヒナと一緒に食事なんて、もの好きだねえ」

「失礼な」

「レイくん。よかつたら、レイくんも一緒にどう?」

「ありやー、俺はもう食べできちゃつた」

「そつか」

「でも、ご一緒にいいかな?」

「うん、どうぞどうぞー」

レイは私の前の席に座り、私と向かい合つた。

「あれ、レイくん、ほっぺ……どうしたの?」

「やー、昨日階段から落つこちちやつて」

「わ、痛かったでしょ。大丈夫?」

「あはは、全然大丈夫。心配しないで。……で、何の話してたの?」

「ああ、そうそう。もしかしたらレイなら知ってるかも知れないな。おまえ、なんでも知ってるもんな」

「あはは、それでもないよ。それで、何?」

「ん、堀田くんと脇田くんと瀬能くん、昨日、ケンカして停学になつちゃつたんだって」

「ああ、その話、朝のHRで言つてたな。それで、そいつらやつつけたのは誰だ、つて話か」

「そうそう。レイくん、何か知ってる?」

レイは少し考え込んだように唸つたが、

「……ごめん、知らないや」

と、両手を広げてお手上げの様子。

だが、一つ不可解な点が。

「そうか。おまえなら、と思つたが

「んー、残念」

HRで聞かされたのだとしたら、三人が仲間割れをしている、と思っているはずだ。こいつが、もう一人のことを知っているはずがない。

私はレイの方をじつと見ると、

「あ……ん、んうん、アキちゃん。俺、明後日が誕生日なんだー。」
なんて、話をやひすレバ。まつたぐもつて、嘘が下手なヤツだ。

「あ、やつなのー。おめでとー。じゅあ、元羅町に向かおうがよ。」

「あはは、ありがとう！」

一、アラビア語の歴史

いしやんか
年に一度の特権たよ?」

日 あ和 りへんとかうと一通間違ひがんがれ 和二ハ

「レド、瓶返しと二部返しだな。男なら、

「マジかー！……マギちゃん、あんまり高いものくれなくていいから

ね

「んー、じゃあ、千葉へ遊びに行かねえかよ?」

「……」
「…………」

my lover 6(前書き)

やつぱん文章書こてる瞬間が一番楽しいわけで……投稿なんて自己満足だと思つたです。読者様に面白こよ、って言つてくれると嬉しいもんですね

After 4 hours

今日は部活に参加せず、真っ直ぐ帰宅することにした。相変わらず後ろにくつづいてくるレイが、今日はいつも増してよく喋る。

「やー、ヒナ？ずいぶんマキちゃんと仲良くなつて、よかつたねえ。俺以外に友達がないんじゃないかと思つたけど、全然そんなことないみたいで安心したよ。ヒナも段々成長していくんだな……って、なんでこんなに上から目線なんだうね、あはは。あ、そういうヒナ、聞いてよ。昨日家帰つたらさ、母さんが電子レンジの使い方よく知らなかつたみたいでさ。卵入れてレンジ爆発させてたんだ4よー！今時卵レンチンしたら爆発するなんて、知らない人いたんだなー、なんて思つて！いやーびっくりしたけど面白かつたんだ。そうそう爆発と言えば、ウチのクラスの科学の担当のアフロ、今日髪切りに行つたみたいでさ、アフロしぶんでんの！めっちゃ笑つたわー！アフロでハゲごまかしてたのにさ、しぶむもんだからハゲ感丸出し！超うけるつたらないよなー」

ああうるさい。こいつに限つて、人間が冬に冬眠しないことを呪うね。

「うつせー、ちよつと静かにできないのかおまえは」「あ、そう？うるせかつた？ごめんごめん。帰り道、話題がないとつまんないじゃない？」

「おまえの話聞いてるぐらいなら、黙々と歩つてる方がマシだ」「あちゃー、ひどい言われよう」

それからはレイも静かに私の隣を歩いていた。

「……が、だ。朝あんなことがあったのに、こいつは何故こんなにもいつもと変わらない態度なのだろう。私なんか調子狂いっ放しだつていうのに。」

「……レイ、おまえや。明日日、誕生日なんだろ？」

「気がつくと私は、そんな話題をレイに投げかけていた。

「ただけど、何か買つてくれるの？」

「バカ言え、おまえ、私の誕生日に何くれたよ」

「ん、イモリの黒焼き」

「そう。こいつは私の誕生日（もう過ぎた）に、イモリの黒焼きをくれたのだ。迷惑極まりない。」

「ネットで調べたけどよ。媚薬じやねーかアレ」

「そうだよー。いやー、「冗談だよ冗談」

「ふざけすぎだつづーの。媚薬なんか使つても、誰がおまえなんかに欲情するかよ」

「え、使つたの！？」

「使うわけないだろ。バカバカしい」

「やつぱり？」

レイは相変わらずへらへらと笑い、そして私に歩幅を合わせてついてくる。私たちのことを全く知らない人が見たら、こいつが私の従者か何かだろうと勘違いするかも知れない。

「まあそれは忘れてよ。来年はちゃんとしたのあげるからー。」

「はーはー。期待しないで待つてるよ」

本当は嬉しくせに、口からはそんな強がりが出てくる。そこではつと氣づき、これは、来年も一緒にいよう、ということなのだろうか、なんて、とんだ拡大解釈までしてしまつ。私もとうとう、頭のネジが吹つ飛んだのだろうか。

「……つと、ヒナん家、着いちゃつたね

「ああ。じゃあな」

気がつけば私の家の前で、レイはこつこつと、いや、こやこやと笑いながら手を振つた。当たり前のことだが、一緒に帰るのはここ

まで。

「日曜日、楽しみにしてるからね

「あ、ああ。……私もだよ、言わせんな恥ずかしい」

「あはは。そのぐらい素直になつてくれた方が、かわいいと感づよ？」

「う、うるさいなー。わざと帰れよー。」

「言われなくともーーばいばいー。」

「じゃーな」

レイはそれから、いつちを振り返ることなく、走つて帰つていつた。

今思い返すと、その後ろ姿は、いつもより大きく、そして愛おしく見えた。

誕生日、何か買つてやるつかな。

私は珍しく、そんなことを考えていた。

「……あーもう、ムカつく」

やつぽやきながらも、明日、あいつへのプレゼントを買ってに行く計画を立てていた。のだが、

「……しまつた」

やつ。三人組のことを訊き忘れていたのだった。明日聞くひ。

m y l o v e r 7 (前書き)

久々の投稿です

December 20th

朝、私はいつもより遅めに布団から出た。

今日は土曜日。学校はないが、私は早起きをした。普段なら寝過ぎまで自堕落な睡眠を取っているところだが、今日は、明日に迫ったレイとの買い物と、レイの誕生日のために、一人で買い物に行くことにしたのだった。

クローゼットを開けても、女の子らしいかわいい服なんか入っていない。私らしいと言えばそうかもしれないが、いつまでもジャージの女の子なんて、いくら私でもどうかと思う。今日中に、明日着ていく服と、レイへのプレゼントを買いにいかなければならぬのだ。そのためには、まずは腹ごしらえ。私は台所に立つて、寝巻の袖を捲くる。冷蔵庫を開けて、朝食の食材を取りだした。卵、かにかま、マヨネーズ、バター、ねぎ……、ケチャップもあるので、オムレツでも作ろうか。

炊飯器を見ると、昨日設定したタイマーで、既に焼き上がっている。文明の利器は素晴らしい。

ねぎを切って、それを入れたボウルに卵を割つて、塩を少々と、マヨネーズを大胆に入れ、それを菜箸でかき混ぜる。混ぜすぎない方がおいしいので、白身を切つていぐらいでちょうどいい。マヨネーズが、焼き上がったときにいい味を出すのだ。これは私の母から教わった、一家のおすすめである。

フライパンを熱して、バターを敷く。焦げないうちに卵を入れて、焼き始める。我が家の中は火力がいい。卵焼きにしても、高

火力で手早くおいしく作れてしまうのでとても気に入っている。

慣れた手つきでさつさとオムレツを完成させると、茶碗に「はん」と、大きめの皿にオムレツを盛った。ケチャップをかけるときに名前を書いてしまったのは、人間の性だと思つ。

コップに注いだ牛乳と、箸を持つて、一人きりの食卓に着いた。

「……いただきまーす」

「はい、召し上がり

「うわっ！？」

独り言のつもりが、返事をされて驚く。背後から聞こえてきた声の正体は、やはりレイだった。どういか、こいつぐらいしか、家に入ってくるヤツはない。親戚だつたら事前に連絡を寄せすだろうし。

「……ヒナ、ドアノックしても気づかないんだもん」

「インターホン鳴らせよ、この不審者」

「もうそんな仲じやないでしょ。合鍵くらい渡してほしいんだけど？」

「やなこつた」

やはり、勝手に入つてきていたらしい。こいつに驚かされるのもつ慣れた。といつても、こないだの学校で驚かされた時には本当に死ぬかと思つたが。

「ヒナ、俺もオムレツ食べたい」

「もう好きにしろ。」はんよそつてここ

「やつたあ」

レイはいつものにやけ顔で、そそくさと茶碗に「はん」を盛つてきた。箸も適当に取つたようで、向かい側に座つて、私のお氣に入りの箸でオムレツをつつき始めた。

「……美味しいか？」

「うん、最高」

「そ、そか」

「これでいつでも俺の嫁にこれるな」

「……やめりよ氣持ち悪い」

「うはー、今俺、将来俺と家庭を築いてるヒナの姿を妄想してた」

「本格的に気持ち悪いなおまえ」

「今まで本格的じやなかつたのかな」

「いや、今までだつて酷かつたさ」

「だらうねー」

「……おー、私の分なくなるじやないか!」

「あつ、『じめん』『じめん』」

レイは容赦なく私のオムレツにがつつき、私が食べる分が少なくなつてしまつた。

「あ、あはは。そつ、ダイエットだよー。」

「おまえ、私が太つてるつてか」

「ん、脂肪なら足りないくらいじやないかな。特に胸のあた　ぐはつ」

机の下で、レイの向ひの脛に蹴りをかました。

「貧乳で悪かつたな。文句あるなら、牛みたいな女の牧場臭いオムレツでも食つてこい」

「ひどい言いようだなそれ」

食べ終わつた一人分の食器を片づけながら、私は今日の予定を思い出す。今日はこいつのために出かけるんだ。こいつと一緒にいるわけにはいかない。

「そうだ、今日は一人で出かける用事があるからむ。食べ終わつたならやつせと帰つてくれ」

そう告げると、レイはこの世の終わりのような表情を浮かべた。

「えー！今日、ヒナの家でだらだらする予定だつたのに！」

「勝手に決めるなよ、まったく。私だつて暇じやない。おまえにかまつてらんないんだよ」

といったものの、今日の用事はこいつのための用事。こいつにかまつているだけ。本当は毎日が暇なのかもしねりない。

「……えー、今日は一日中暇なんだよ。かまつてよつ」

「ダメなもんはダメなんだよ」

「ふー」

「こいつが駄々をこねるなんてなかなか珍しい光景だ。よほど暇で仕方ないんだろ?」

「……あーもう、わかった。私の部屋でマンガでも読んでる。別にこの際なんでもいいから」

「えつ、いいの?タンスとか漁るよ?」

「それはやめる」

「……わかった。我慢する」

「そんなに漁りたいのかおまえ」

食器を洗いながら、拗ねた様子で机に伏せているレイを眺めていた。

「こいつは一体、私のことをどう思つてこるのだろうか。ただの友達、だろ?」

そりゃそうだろ? 本当に私のことを好いてくれるなら、もっと照れとかがあるだろう。好きな人の家に勝手に上がり込むか? 好きな人のタンス漁りたいとか言うか?

「そりゃ漁りたいさ。ヒナのタンスだよ?」

「なんだおまえ。ウチのタンスに希少価値なんかないぞ」

レイは立ち上がって自分の腹を叩き、満足そうに笑った。

「……オムレツ超美味しかった。また作つてね」

「こいつは、私に対して思つたことを全て口にするヤツだ。友達なら友達って言ってほしい。好きなら好きって言ってほしい。

「ああ、またいつか作つてやるさ。そうだな、明日、一緒に買い物行くんだろ?弁当ぐらいなら、その……作つてやらんでもない」「ホントにつ!…やつたあ!…」

「そんなにはしゃがれても。大したもん作れないぞ?」

「めっちゃ楽しみにしてるから!…」

「わ、わかった」

レイは本当に嬉しそうに、心の底から笑った。それをじっと見つ

めて、こいつのこの笑顔を独占したいと思う私がいた。卑怯な願望かも知れない。恥ずかしい願望かもしれない。しかし、私はもう止まれないほど、たまらなくこいつを愛してしまっていた。我慢ができなくなってしまった。

「明日、楽しみだな。そのために、今日は我慢！大人しく、家でじつとしてるよ」

「帰るのか？」

「うん。ヒナ、忙しいみたいだし。家主のいない家に居座るのも、ちょっとね」

「勝手に上がつといてよく言つよ」

「あはは。……じゃ、また明日！」

「ああ。じゃあな」

レイは小さく手を振つて出て行つた。私はその後ろ姿を見て、自分がこんなにも恋の病に冒されているのだと実感していた。
さあ、今日は忙しいぞ。

「よし、準備準備！」

手を叩いて、今日の準備を始めた。

m y l o v e r 8 (前書き)

まだまだですねー ぶっちゃけた話 これからスタートみたいなもん
ですが

After 2 hours

私は、買い物のために、電車に乗って町に繰り出していた。私の住む町の中で一番大きい駅前商店街。今日は土曜日なので人も多く、私は背が低いので、人ごみに埋もれてしまいそうだった。ここに来れば、大体のものが揃う。私はここで、明日のために買い物をすることにしたのだった。

必要なものは、レイへのプレゼント、明日着ていく服、そして一応、あいつに作つてやる弁当の食材。

気合を入れて、大きめのバッグを持ってきたのだ。これで大丈夫。私は町を歩きながら、まずは服屋を探していた。明日、私は何を着ていくのだろう。女の子らしい服の方がいいのかな。でも今さら女の子らしい格好なんて、レイに笑われたらどうしよう。だったらラフな感じの方がいいのかな。

いろいろと思案しながら歩いていると、何度も名前を聞いたことがある服屋の前に差しかかった。

そうだ、店員さんに聞けばいいんだけど……私は人見知りだ。困ったな。いきなり壁にぶつかつた。とりあえず、店に入つてみよう……。

自動ドアが開くと、そこは未知の世界だった。服が陳列しているだけの質素な店ではなく、あちこちの装飾が、妙に女性らしい雰囲気を醸し出している。ここは、私がいるべき場所ではないんじゃないかと思うくらい。

「いらっしゃいませー」

店員の声にふと我に返つたが、完全にトんでもいたと思つ。私はとりあえず散策的な気分で、店内をうろつくことにした。

置いてある服のどれを見ても、私が着るよつな服ではない。かわいらしい服の数々に、目が眩みそうだった。私のジャージ姿とのあまりのギャップに落胆していると、

「……ヒナちゃん？」

突然、後ろから話しかけられた。一体何かと思ったが、後ろを振り返ると、そこには見慣れた少女。

「ま、マキちゃん！」

「ヒナちゃん、珍しけ。お買い物？」

マキちゃんは普段はおさげにしているが、今日は髪を下ろしていて、いつもとは違う雰囲気。彼女は、この店の従業員がしているバッジを胸につけている。服装も、いつもの地味な制服とは全く違う、かわらしいもこもこした服を着ていた。

「まあ、そんなとこだけど……マキちゃん、ここで働いてるのか？」

「うん。ずいぶん前からここでバイトしてるの」

「そ、そなのか」

意外な人物との遭遇に驚いているが、これはチャンスかもしれない。

「……マキちゃん、相談があるんだけど」

「……？」

私はマキちゃんに、全てを話した。レイのことが好きだとこういと。明日、一緒に買い物に行くために服を買ひにきたこと。でも、何を買えばいいかわからないということ。

私は初めて人にこんなことを相談したのだが、マキちゃんはまつすぐ私を見ながら、真摯に話を聞いてくれた。本当にいい子だと思う。

一部始終を話すと、マキちゃんは目を輝かせていた。

「ヒナちゃん、かわいい！」

「な、な、なんだよそれ！」

「だつてさ、一生懸命なんだもん！私まで嬉しくなつてきちゃつた。応援しちゃうよ！」

「あ、ありがと」

「で、かわいい服とか着てみたいんだよね？」

「いや、そりなんだけど……似合つかな……？」

「きっと似合うよ！ヒナちゃん、かわいいもん」

「あら、変な気分だ」

ひつちおいで、ヒナちゃんは私をどこかに連れていく。いろいろな商品棚をぐるぐると歩き、いろいろな服をあてがつてはまた歩き。その最中、マキちゃんは一生懸命なようだった。私のために一生懸命になつてくれるのは嬉しいが、服選びつて、こんなに大変なのか。

「……じゃ、これ、試着してみて？」

「え、し、試着？試着するのか？」

「もちろん。着てみて小さかつたり、似合わなかつたりしたら困るでしょ？」

「う、そりやそうだけど」

服を持たされ、試着室に入る。カーテンを閉めてから気づいたが、こんな短いスカート穿くのかつ。

ジャージを脱いで、始めて見る服を着ていくが、どうも勝手がわからない。悪戦苦闘していると、マキちゃんが外から声をかけてきた。

「ヒナちゃん、大丈夫？」

「だ、大丈夫じゃないかも」

「んー、どれどれ」

マキちゃんは容赦なく、私がいる試着室に入ってきた！

「ちょ、ちょっと、マキちゃん！？」

「気にしなくていいでしょー？女の子同士なんだし」

「ま、まあそりうだけどさつ」

まだほとんど何も着ていない、ほぼ下着姿だったのだが、マキちゃんは気にする様子もなかつた。

「わ、ヒナちゃん、すつしに足細い！いいなーーー！」

「ちょ、声大きいって」

「私なんかこんなんだよ、むこーーー」

と言いながらマキちゃんも自分の足をつまむが、マキちゃんも細いと思う。というか、マキちゃんめっちゃナイスバディー。制服ではわからなかつたが、胸も大きいし。

「……これはえっと、こつやつて……」

そこからは眞面目に服の着方を教えてもらつて、私はなんとかそれを着れるようになった。私には似合わないんじゃないかと思われた服も、マキちゃんは本当に似合つてこると言つてくれた。ここは服屋のセンスを信じよう。

サイズもぴったりだつたので、それを脱いでジャージを着る。マキちゃんはそれをレジに持つていって、袋詰めをしていてくれるらしい。やはり私はジャージの方が落ち着く。

更衣室を出ると、マキちゃんは笑顔で待つ正在してくれた。

「それじゃ、お会計、大丈夫？たくさん買つたから、なかなかいい値段するけど」

「それでも、安いの選んでくれたんだよな？」

「うん。…………ここだけの話、この店ちょっとと高すぎ

「あはは。店員が言つつか」

レジではなかなか見たことがないような金額に驚かされたが、両親の保険金も貯金しているし、父が生前稼いでいた金はかなりの額だ。私はおかげさまで、金に困つたことはない。

「じゃ、がんばってね、ヒナちゃん！応援してるーーー！」

「マキちゃん、ありがとな。助かったよ」

「ん。今度、一緒に服買いに行こつよーーー！」

「ああ。その時はまたよろしく

「任せといて！」

「じゃあ、また」

「ばいばーい！」

マキちゃんの優しさに感動しつつ、私は店を出た。

次はどこに行こう。プレゼントの中身は、自分で考えなければ。

何がいいだろうか。冬だし、防寒具的なものが嬉しいだろうか。

上着は明日買いに行くし、他のもの……あいつ、マフラーは持ってるし……。

しばらく悩みながら歩いて、ここはやはりいろいろなものを見て決めよう、と決め、町に一つしかない大型のディスカウントショップに向けて歩き始めた。

歩きながら、私は明日のことを考えていた。明日は雪だから一緒に買い物に行くのだろうか。一緒に買い物に行って、そのあとは……あいつのことだ。きっとウチでだらだらする、なんて言い出すのだろう。

それなら、あいつをちゃんと見てやろう。それこそ、ケーキでも焼いてやろうか。

子供みたいに喜ぶあいつの顔が浮かんでくる。思い出しても、私にもやにや笑っているかもしない。あいつに似てきたかもしないな、気持ち悪い。

でも、いいや。

手が冷たくなって、ジャージのポケットに手を突っ込む。白い息を空に向けて吐いて、冬を実感した。

手が冷たい そうだ、手袋にしよう。それがいい。

いいアイディアに気持ちは浮ついて、足取りも軽くなる。

それからは、買い物が楽しくて仕方なかつたのを覚えている。ディスカウントショップの防寒具コーナーでダークブラウンの毛糸で編まれた温かそうな手袋を買って、プレゼント用の包装をしてもらつた。店員さんもどこかにこつこつと笑っていたのが、少しだけ嬉しかった。

その店の食品コーナーで、クリスマスも近づいて売り切れそuddtたケーキの材料を買って、私は家路に就いた。といつても、もときた道を引き返していくだけなのだが。

帰り道、マキちゃんが働いている店を覗きこむと、マキちゃんは一生懸命働いているようだった。私もバイトでもしてみようかな、なつて思った。

帰り道の電車のホームにて。たくさんの買い物袋を持って電車を待っていると、ケータイがポケットで鳴動していることに気づいた。袋を左手に持ち替えて、右手でケータイを取る。画面を見ると、“俺様は神”と書いてある　レイからか。面倒くさいこと思いながら電話に出た。

「もしもし」

『もしもし、ヒナー?』

相変わらずテンションの高いヤツだ。

『用事、もう終わったの?』

「ああ。今帰り道だ」

『そかそか。何の用事だったの?』

「ん、何でもないよ」

『あー、隠し事はよくないぞ』

「なんだそれ。おまえだって、隠し事してるだろ」

『……え、お、俺が?』

「してるだろ。一昨日の夕方、おまえ何してたよ」

一昨日 つまり、堀田らがケンカしていた時、レイは何をしていたのかと聞いたのだ。その翌日、ケガをして現れたり、知らないはずの“第三者”を知っていたり、怪しい点が多くある。私は、こいつが三人組をシメたのだと思つているのだ。

『……ばれてるか』

「当たり前だ。私が、おまえの嘘に気づけないとでも思つたか」

『いやー、ヒナには敵わないなあ』

「……あんま、心配かけさせるなよ」

『……ごめん』

心配してくれたの?なんて言つと思つたが、素直に謝られては反應に困る。

「……まあ、アレだ。怒っちゃいないんだ。ただ、おまえまで停学になつたんじや、その、さ、寂しいだろ」

『ヒナ……』

「ああもう。だから、あんま危ないことすんなつてコトだよー。」

私は気づけば声を張り上げていたが、隣に立つてゐる人が、おほん、と咳払いしたのが聞こえてきて、声のトーンを落とした。

周りには親子連れや若者、老人まで、幅広い年代層の人たちが大勢、電車を待つていた。電車が混むのは嫌だな、なんて思いながら、電話を持つ手を強く握る。

「……マキちゃんがかわいそそうだと思つたんだ？」

『だつて、酷いじやないか。かわいそうだ』

「わかつてゐるつて。もう過ぎたことだ。いいじやないか」

『……マキちゃんに言わないでくれよ? 恥ずかしいから』

「言いやしないよ」

それつきり、レイは黙り込んでしまつた。電話で黙られても、とも思つたが、私は黙つてケータイを耳に当てて立つてゐた。

ホームにはどんどん人が入つてきて、見る見るうちに混んでいく。私は最初の方だつたからなんとか乗れそうだが、最後尾に近い人は、次の一本じゃ乗れないんじやないだらうか。

『ヒナ。明日、何時に待ち合わせよっか』

「……ああ、そうだなあ」

『お昼に、家に迎えに行くから』

「そうだな。それぐらいにきてくれ』

『……なんか、久しぶりだね、一人で出かけるなんて』

それもそうだ。私たちは幼馴染だが、知り合つてから一人で遊ぶことなんか少なかつた。私が内気だつたのもあって、私たちはただの知り合いぐらいの仲だつた。

しかし、両親が死んでから、レイはやたらと私に話しかけてくるようになつた。最初は気を遣つていただけだつたのだろう。しかし、徐々にレイは遠慮をなくしていった。それは、レイが私に心を開い

てくれた、ということだった。最初は戸惑つたが、私も次第に心を開いたのだった。今思えば、私はそのときからずっと、こいつのことが好きだったんだ。

「そうだな。一人で最初に出かけたのは、バッシュを買いに行つた時だけ」

『うん、覚えてる。懐かしいなあ』

そう。高校一年生になったとき、私もレイも中学時代から履いていたバッシュが小さくなつて、一人で買いに行つたのだった。それが、初めてのデートだったのかもしれない。

「……なあ、私はそ

『ん?』

「ずっと、おまえのこと

『おおおおー』

ずっと、おまえのこと、好きだ。勇気を出して言つた言葉は、電車がホームに到着した音で、かき消されてしまった。

『……ヒナ? ごめん。電車の音で聞こえなかつた。もつかい!』

「……で、電車、来たからさ。あとで電話するよ

『ん、そつか。またあとで』

せつかく勇氣を出したのに。

ふしゅううう、と電車のドアが開き、人の波に流されながら電車に乗る。人でぎゅうぎゅうになりながらも、ドアは閉まり、重たくなつた電車は発進した。

言つてしまつた。

本当に聞こえていなかつたのだろうか。聞こえなかつた振りをしているだけじゃないだろうか。聞こえていたのに、聞かなかつたことにしようとしていたんじゃないかな。

いろいろなマイナスな感情が渦巻き、血の気が引いていく。私はそこでひとつため息をつくと、

びーつ! びーつ! びーつ!

突然、車内に警告音が鳴り響いた。と思つと、がくん、と電車が

揺れる。窓の外の世界が、上方向にフロードする。

車内に乗客の悲鳴が響きわたる。ゆっくりと電車は左に傾き、倒れていた。人の波に押し流され、私は壁に叩きつけられる。その上にさらに人が重なり、小さな私の体では耐えきれなかつた。

めり、めり……ぼぎつ。

肋骨が砕ける音がした。強烈な痛みに、呼吸ができない。人の波は止まることを知らず、私に圧しかかる。腕、足……いたるところに重みを感じ、やがて私は、吐瀉物の混ざった血を吐いた。

ごぼつ、じふつ。

吐いた、と言つても、吐き出す体力は残されていなかつた。それは喉の奥に残留し、呼吸器にゆっくりと侵入していった。完全に呼吸を閉ざされ、そこで、私の意識は消えていった。

m y l o v e r 9 (前書き)

グロくも何ともないですね

One, send

目を覚ますと、私は白い光に包まれていた。真っ白な世界の中、羽毛に包まれているような、柔らかい感触のベッドに寝ているような心地だった。

何があつたのかは覚えている。電車が脱線したんだ。脱線事故で、私は死んだ。呆気なかつた。吐瀉物が私の呼吸を止め、ゆっくりと呼吸を終えた。

そして、ここが天国、といつたところか？私の胸には鼓動がなく、自分が死んだのだという事を再認識することができた。

「いらっしゃい、お嬢さん」

柔らかい、温かい声がした。声の主を見ると、真っ白な肌をした、真っ白な長い髪の、真っ白な服をまとった女性が立っていた。

きれいな人だ。

私は、その人を見て、瞬間にそう思った。

「きれいだなんて、そんな。嬉しいわ」

「……え」

思つたことが、聞こえているのか？

「ええ。私は、あなたの心が解るわ。心の声が聞こえるの」

女性はゆっくりと歩み寄ってきて、私が寝ている横に腰かけた。

「見ていたわよ、あなたのこと。がんばったのね。えらいわ。……

あなたががんばって選んだ手袋、彼、きっと喜んでくれると思つ

「あ……え？」

「あなたの予想は、半分正解。ここは、天国に一番近い所よ。私は、その門番。あなたが天国で暮らす資格があるかどうか、見極める者

よ

女性は私の頬を撫で、目を閉じた。そして一筋、涙を流した。

「……まだ、あなたはここにきてはいけない」

「まだ……？」

「ええ。あなたは、やり残したことが多すぎる。あなたも、わかつているでしょう？」

そう聞かれて、私はいろいろなことを思つた。考えた。祈つた。

願わくば、私は、
願わくば、私は、

「私は、まだ……」

「いいのよ。甘えて、いいの」

「……まだ、死にたくない」

抑えてきた感情が膨れ上がり、目から、口から、次々に溢れ出した。想いは涙になつて、想いは言葉になつて、想いは鼓動になつて、私の体を動かした。

「まだ、レイに、好きだつて、伝えてない。ケーキも作つてない。手袋も、あげてない。服だつてせつかく買ったのに、着てない。かわいい、つて、褒めてほしい」

嗚咽混じりの声は声になつてはいなかつた。しかし、女性は黙つて、私の体を抱きしめた。

「誕生日おめでとうつて、言いたかった。……これからも、一緒にいたかった！」

私の言葉は、目の前の女性が聞いていた。ただ、この言葉を、レイに伝えることはできないんだ。私はそんなことを考えて、また涙が止まらなくなつた。

最後に泣いたのは、両親が死んだとき。それ以来、私は涙を流さなくなつた。その反動が今になつてきたのだろうか。涙も嗚咽も、止むことはない。

「……あなたのこと、ずっと見てきた。お母さんとお父さんが亡くなつてから、あなたは彼以外に、誰にも心を開かなかつた。でも、友達ができたわね。えらいわ。あなた、恋だつてして。素敵だわ」

女性は私の涙を指で拭い、自分の額と私の額をくっつけた。

「もう一度、言つわね。あなたはまだ、ここにきてはいけない。ここにきてしまつたら、きっとダメになつてしまつ。あなただけじゃない。レイくん。彼はきっと、全てを失つてしまつ」

「……レイが……？」

「ええ。だから、あなたに時間をあげる。……三日だけ、あげるわ。三日で、やり残したことを、済ませてきなさい」

「……え？ そ、それって……？」

女性が話を済ませると同時に、私の体はまた光に包まれていった。やがて視界は白く染まっていき、

「じゃあ、がんばって」

「うん。……ありがと」

真っ白に包まれた。最後に視えたのは、女性の柔らかい笑顔だつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1622ba/>

Refrain my life

2012年1月10日20時59分発行